

福島原発避難者を迎えて女性消防団の活躍

福島県田村市消防団
常葉地区隊庶務分団女性部
部長

渡邊 清子 (55歳)
消防団歴 20年 (農業)



福島県田村市消防団
常葉地区隊庶務分団女性部
班長

三浦 真由美 (38歳)
消防団歴 12年 (会社員)



福島県田村市の概要と被害状況

福島県田村市は、福島県の沿岸から約40km西、郡山市まで約30kmの阿武隈高原の中央に位置し、福島県の中通りにあって浜通りとの結節点となる地域である。気候は、年間の気温較差が大きく、降雨・降雪量は少ない表日本内陸山間型の特徴を持ち、寒候期においても、連続した降雪期間は短くなっている。面積は458.30km²で約62%を山林が占める典型的な中山間地域となっている。人口は約4万人である。

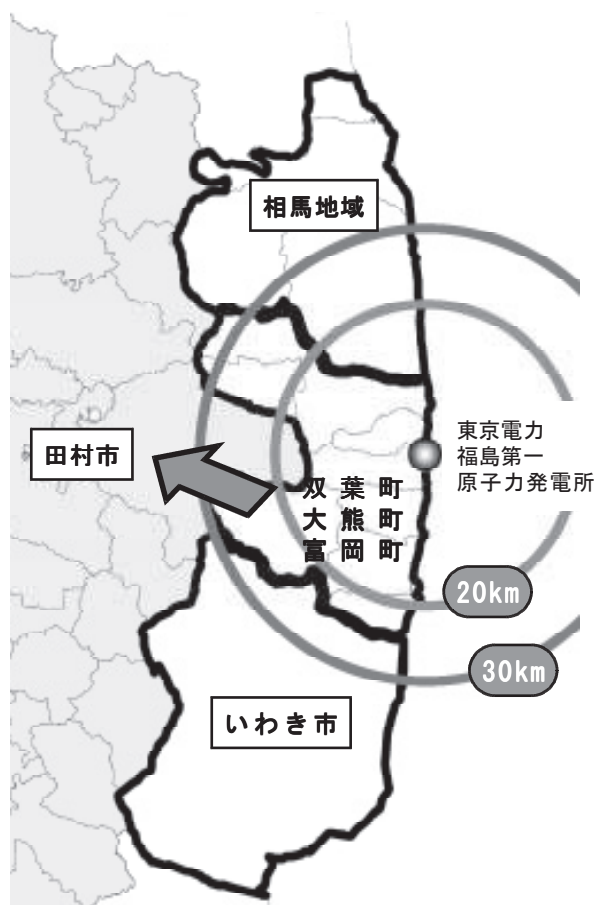
田村市消防団は、1本部5地区隊1,559名で構成される（平成21年4月1日現在）。なお、女性部を設けているのは大越地区隊と常葉地区隊のみである。田村市消防団常葉地区隊女性部は、平成4年に福島県で2番目の女性消防団「常葉町女性消防団員」として団員10名で発足した。平成15年には20名に増員され、平成17年3月の町村合併に伴い田村市消防団常葉地区隊女性部となった。

田村市では、3月11日の東日本大震災で震度6弱の揺れを観測した。住家被害は全壊14棟、半壊162棟となったが、死者は病院から避難する途上で亡くなった方1人、負傷者5人とどまった。田村市内1万2,000世帯で、1件の火災が起きたものの、直後に消火された。当日は地震が起きてから、各戸に付いている防災無線で呼びかけた。

田村市は、福島第一原発から西方へ約40km離れ

た所にあり、警戒区域や緊急時避難準備区域からはずれたが、震災翌日から、国や県の要請で原発避難者を受け入れることになった。田村市では、平成23年の予算で毛布と仮設トイレを買う予定だったが、購入する前に地震が発生し、乾パン300食くらいしか備蓄はなかった。

12日早朝、大熊町の3,000人の避難者の受け入れ要請があったが、ふたを開けてみると双葉町、



3つの町からの避難民を受け入れた田村市常葉町

富岡町、大熊町の住民等約6,000人を受け入れることになった。田村市では急遽10箇所以上の避難所を開設し、当初5,000人位を受け入れ、残りは三春町に行ってもらった。

県が大熊町住民の受入れに併せ、食事も準備したとのことだったが、12日の夜に大熊町分の食料や毛布などが、大きな避難所になった総合体育館に「大熊町の分」と届けられたため、約1,200人を収容した総合体育館だけで3,000人分の物資を全部配分してしまい、全避難所に届けられなかった。田村市では、市職員や消防団等で避難所開設・運営を行い、炊き出しは社協を通して日本赤十字社に加入するボランティアである「赤十字奉仕団」に依頼した。

震災前の女性消防団の活動

田村市女性消防団が発足した当初、制服を着て広報だけをやるマスコットの存在だった。私は方向性を悩み、女性消防団の全国大会に毎回参加したりして、いろいろな意見を聞いた。その中で思い付いたのが、団員や被災者の小さな怪我の手当をする災害現場での被災者のケアだった。女性団員は地区隊長から要請があった時、その都度動く。今では何か起きた時は出動するものと思われるまでになった。

女性消防団は月2回の広報や、年に1回、独り暮らし老人訪問をやっている。秋の一斉放水訓練や避難所開設訓練にも参加している。田村市では地区ごとに自治会はあるが、災害の時は消防団を中心に動いている。

揺れの後、余震警戒を呼びかけ

地震が起きた時、私は娘の家にいた。携帯電話の緊急地震速報が鳴ると同時に地震が来た。自分は孫を抱えて外に出て、落ちてくる瓦に注意し、収まるまでしゃがみこんでいた。近くの家には

団員仲間と一緒に、「余震注意」を言って回った。本当に震度5くらい大きな余震がひっきりなしで、もう日本が終わってしまうのではないか、と思った。

私は1時間後くらいに、娘の家から地震から車で自宅に戻った。自宅は、壁や車庫のコンクリにひびが入っていたが、地震の揺れが収まり、火災だけに気を付ければ、1日位はパニックになっても、それで終わりだと思っていた。常葉町では火事は起きなかった。時間帯が良かったと思うが、常日頃火災予防の呼びかけを団で行っているので、それが住民の頭にあって、功を奏したのではないかと思った。

当日は、町の中も静かだった。自宅周辺は何も自由なく、避難する必要がなかった。電気は止まらず、テレビで情報も得られた。断水しても井戸が多かったので水にも困らない。ガスは、プロパンガスを使用している。農家だから食べ物も不自由せず、保存食も1か月分くらいは冷凍庫にあり、スーパーも何軒か開いていて食事の心配もなかった。

16時頃息子が戻ってきて一緒にテレビを見たが、津波の映像だけは鳥肌が立った。この世の出来事ではないような気分だった。ガソリンだけは1日目から不足していたので、車で走らないようにして家にこもっていた。

常葉町は全部で3,000戸あり、震災時には各地区に10数人の団員が、ふたりで一戸ごと回った。うちの地区は47戸で、第一に独り暮らしの家を回る。他にも周りの地域の確認に回って、それはほぼ毎日やっていた。当日は、男性団員のみの活動で、女性団員は翌日から活動した。

国道288号線だけが生きていて、2日目の朝から、浜通り方面からの避難者の車で混雑していたようだ。後で聞くと、この地区からも海沿いにいた人がいて、本当に危機一髪で辛うじて津波から逃げたという人が何人かいた。うちの地区から浪江町に仕事に行っていて、命は助かったのに、ショックのせいか自殺してしまった方もいた。

突然来た避難所開設の招集令

翌12日の朝8時半頃、電話が通じないからと地区隊長が私の自宅に来てくれた。富岡町、大熊町の避難者で、田村市都路町での受入れが一杯になり、常葉町に避難して来るので、行政局に9時に集まり、田村市常葉体育館での受入れ準備をしてくれとのことだった。三浦班長も呼び出され、私も慌てて他の女性団員を呼びに行き、20名の女性消防団員のうち10名位が、9時頃に集まった。

打合わせをする間もなく、すぐに常盤体育館で、女性団員、男性団員、幹部団員、行政職員など50名ほどで、ゴザや備え付けの専用シートを敷いたり、受入れの準備をした。避難所開設訓練をやっていたので、どういう作業が必要か、ある程度イメージできていた。

来るはずの毛布を待っていたが、10時半くらいから避難民が先に来てしまった。バスが列を作って直接体育館に来るので、一度にドッと来た。体育館入口の受付で、家族やグループなどの代表者の名前と人数、住所、携帯などの連絡先を書いてもらった。避難者名簿の台紙は市が当日作った。

常葉体育館には、約600人が避難してきた。避難者は住民だけでなく、学校単位、会社単位の作業服のグループなどもいた。皆、前日からほとんど飲まず食わずで避難していたらしい。中には、欧州系の外人もいて、会社の人が通訳していた。

来た順に通路だけ空けて奥から詰めてもらうと、それぞれの地区やグループで居場所を決め、自然と真ん中に縦一本、横何本かの通路ができた。毛布が来ると、さらにそれぞれの寝るスペース分くらいが自然に広がった。避難してきた人達が、それぞれ配慮し合って、特に混乱などはなかった。

暖房器具も2個しかなくて寒かった。避難してきた中には乳飲み子がいて寒さが心配だった。緊急事態で市に指示を仰がなかったが、乳飲み子とその家族は絨毯がある保健センター、高齢者は和室があり多少暖かい公民館へ移ったらどうかと思



避難所となった田村市総合体育館（田村市提供）

い、体育館に避難者が落ち着いた後、見回って該当する人に声を掛けて移した。

常葉町民や団員が供出した支援物資

結局最終的に避難者用の毛布や食糧は来なかった。本当に寒かったので、16時くらいから、行政が防災行政無線で毛布などの支援を全町民に呼びかけた。すると、町民や商店などがすぐにたくさん毛布や支援物資を持って来てくれた。それを、女性団員が振り分けたが、振り分けが大変だった。公平性を配慮しつつ、持病のある人にはなるべく厚い布団など、特別な支援が必要な人にも配慮して、出来る限りのことをしてあげた。大量に持って行く人もいるが、遠慮深い人もいたので、後で体育館を巡回して不足している人に陰から毛布を足して回った。

水とお握りは、夕方17時か18時位に来た。少し残念だったのが、支援物資が来た時に、人数を把握してから配ると言っていたのに、配る前からロビーに避難者が並んでしまったことだった。一回解散してもらってから配り直した。玄関先に運んでしまったが、出来れば全体が見えないように舞台の裏に一旦置いてから配れば良かった。

市が13、14日に第2弾、第3弾の防災行政無線で衣類を呼びかけると、これもたくさん集まり、13日夕方に一式揃った。集まった衣類を、行政局の下で女性団員が男女・年齢別に仕分けした。一度に分けると収拾がつかなくなるので、1軒1軒

声がけして、小さい子のいる家族から来てもらい、次に、薄着の人に声をかけ、最後は、一斉に取りに来てもらった。赤ちゃんの分がないので、自宅から持ってきてあげた。

学校単位で避難した子どもを探しに来る母親等もいた。避難所同士のやりとりはある程度できていて、公民館でとりまとめ、各避難所に避難者名簿を貼り出し、それを見てもらうようにした。

消防団員の炊き出しも

常葉体育館内が落ち着いたのは12日に午後で、その間女性団員が見回った。乳飲み子のミルクがなかったが、行政も準備していなかったのも、私が班長と12日14時頃、ショッピングセンターに自費で買いに行き、買占めが行われている中、ミルク5缶、お尻拭きとおむつを各5個ずつ買った。風邪をひいている子供がいたので、自宅から薬を持ってきたり、不足している物で補充できる物は個人で用意した。

避難者用の食糧は確保されたが、消防団員のご飯がなかった。自分と班長の2人で、16時頃、消防団員用に自宅で20升くらい炊き、2時間くらいかけてお握りを握った。作ったお握りは行政局に置いて、団員に限らず誰が食べてもいいようにした。団員が初めて食事できたのが19時くらいだった。この炊き出しを3日間くらいやった。

テレビの取材は大きい総合体育館に行って、ここには来なかった。テレビで見えていたら総合体育館に救援物資が届いたと放送していたので、あそこで止まってしまったのだな、と思った。

常葉では、住民や小学校などから持ってきた毛布で避難民1人に2～3枚渡せるくらい充実したので、最終的にはテレビで見た総合体育館よりも、逆に居心地がよくなったと思った。

避難民からは2日目くらいに歯ブラシが欲しいと要望があったが、食べ物の手配が先で、洗面器や歯ブラシなどはなかなか用意できなかった。無い物づくしで、割り箸も買おうとしても売ってい

なかった。食料品は冷凍庫にある物などを売ってくれたが、流通が停まっているので、日用品が売っておらず、行政に要望した。

自治会の行政区長さんから、避難民用の炊き出しをすると申し出があったが、市から指示がなく残念がっていた。この辺の農家で米はたくさんあるし、持ち回りで火災時の炊き出しをしているのだ。自治会の行政区長さんに頼めば容易にできたことなのに、残念だった。

自主運営された避難所を支援

3月15日くらいになると、避難所の人達が自分達で避難所の仕事をしてくれるようになった。自分達はボランティアのようになったが、行政局の人達は大変で、一週間は寝られず顔がやつれていた。初めの3日間は仮眠もとらず食事も避難者を優先していたようで、見ていて可哀相なくらいだった。

お風呂も、避難者は4日間くらい入れず、1週間後くらいから常葉荘などの協力に入れるようになった。商店街の小さな店はやっていたので助かった。避難者も買いに行っていたのかもしれない。テレビは、体育館のロビーに1台あり、そこで皆情報を得ていた。

初めの3日間位は、無我夢中だった。自分達も何もかも初めての経験だったので、今思い返すと、自分達が体育館に来る時、タオルや日用品、薬などを自宅から持って来れば、行政の人にいちいち聞くより、早かったと思った。常葉避難所では人がいなくなる1か月間くらいまで様子を見ていた。徐々に行く先が見つかった人が離れて行って人が少なくなると、公民館に移り、避難所が解消された。

福島原発からの放射能

福島原発の事故による放射能を気にする人もい



避難所となった田村市総合体育館（田村市提供）

る。避難者の中で、被ばくしているから、調べてほしいという人もいたので、船引の公民館に集まってもらって検査した。大熊町の人達は確かに被ばくしていた人もいたが、ここもあの頃の線量は高かった。4日目過ぎたころから線量を計りだした。しかし、あの時は、季節的に海側の風なのでここは大丈夫だろうと言っていた。それと、ここに大きな山があったので助かったと思う。

やはり世代によっても考えが違い、小学生のお母さんなどは不安に思う人も多いが、常葉小学校に通う子ども達の中では、引っ越しする人は少なかった。お母さん方もまだ冷静に見守っていて、静かな印象だ。30km圏内の近くに小学校もあるが、校庭の土の入れ替えをただけで、通学も歩いて普通に行っているし、外で遊び、この前運動会も開催した。

農家は、落ち葉を腐らす肥土が作れないので、買わなくてはならず、余分なお金がかかるのが本当に困る。また、商店街は、閉まっている店も多く、実際の被害もだが、風評被害が全体に影響している。

女性消防団が目指す方向

避難者から、文句は一つもなかった。ありがとと皆から何度も言われた。赤いお揃いのジャンパーを着ていたので声がかけやすかったようで、何かあれば行政よりも先に声をかけてくれた。女



常葉地区隊女性部（田村市消防団提供）

性なので生理用品なども聞きやすかったようだ。

今までの経験から感じたことは、火災などが起きた時、周りの人達は火のことに集中してしまって、被災者のことまで注意が行かない。そのため、女性団員は、消火活動ができない分、被災者のケアをするようにし、その都度必要なものを考えてきた。地震の時も、避難所となった体育館に集まった時からが私達の出番。避難者だけでなく、消防団員のお世話から、いろいろ幅広く動いた。

これまでやってきた方向性は間違っていなかったと誇りを持っている。このような対応ができたのは、日頃の訓練のおかげだ。団員は全員、各地区でも訓練しているので、ある程度のことは対応できる。つくづく訓練の大切さを感じた。やっていると意識が違う。自分が言わなくても、三浦班長をはじめ、みんな団員がやってくれる。

その後、避難所が解消して通常の状態に戻ったが、車も使えず、通常の広報活動ができず止まってしまう。女性消防団用に軽自動車欲しい。市全体で40名いる女性消防団を市の本部付にと言われたことがあったが、せっかく地域に密着しているので、地元の団員でいたいと言った。今後どうなるかはわからないが、できれば地元の団員でやって行きたい。